

## 「少納言よ」は誰に向けた問いなのか

— 『枕草子』「香炉峰」章段の〈対話〉にみる〈ズレ〉の受容 —

中田幸司

### 要約

『枕草子』「香炉峰」章段の〈対話〉について〈ズレ〉と〈異論〉の観点から叙述の方法を論じた。本文(作品/テキスト)の生成と受容の諸相は、多様化する現代社会における今日の古典教育に必要であることを示した。  
キーワード: 枕草子、〈対話〉、〈ズレ〉、受容、古典教育

### 一、はじめに——自他の言葉は異なる

言葉とは何か——文学研究や国語教育にかかわり、言葉を指導する者の責任はいつの時代も大きく、それゆえ、なかば哲学的で永遠に答えが出にくい言葉とは何かを考えることは常に更新されるべきことであろう。

まずは、話す言葉と聞く言葉、書く言葉と読む言葉には言語活動としての位相差がある。またその言葉が自分に向けられれば、さらに次の言葉を生成するきっかけとなるし、相手に向けられれば、相手はそれをきっかけに新たな思考や言動が生じてくる。言葉を紡ぐことにおいても、他からの言葉を受容する際にも、必ず位相差——〈ズレ〉——が生じ、元となった言葉やそれ以前の思いや考えから

新たな展開——〈異論〉——が誘発されていく。<sup>(1)</sup>

以下、言葉を受容する際に生じる〈ズレ〉という観点から『枕草子』における叙述の方法を考えたい。そのために本論では対象を〈対話〉にしほり、そこにみる〈ズレ〉とはどのような特徴があるのか、さらに〈ズレ〉から誘発される〈異論〉を視野に入れて、読者が本文の表現を受容する際の〈ズレ〉についてもあわせて考えることで、同書の表現から〈ズレ〉／〈異論〉を読み取ることの重要性を指摘したい。

このことは、さまざまな属性の異なる人々がいる現代社会の中で、自他の言葉は異なり、言葉はそもそも通じないものなのではないのか、といった思いを抱いたことに発想を得た。

所属: 文学部国語教育学科

受領日 二〇二〇年三月二日

## 二、日本を代表する枕草子

『枕草子』は日本を代表する古典文学である。「日本を代表する」と述べたのには、今日、小学校から中学校、高等学校のいずれの校種においても国語の検定教科書に掲載され、一貫して国語教育に資する教材の役割を担っているためである。もちろんこの事実が即座に「日本を代表する」ための十分な条件とは考えないが、少なくとも『枕草子』が日本古典文学における高い認知度をもつことは間違いない。特に、初段「春はあけぼの」は、春夏秋冬の折々を端的に描写しながら、「をかし」の世界を示したことで、広く読者の共感を得ることに成功してきた。ここには広く共感を呼ぶ叙述の工夫があることも明らかとなっている<sup>(3)</sup>。また、清少納言が中宮定子に出仕した人物であったことも、この本文(作品/テキスト)を「日本を代表する」レベルに押し上げたことと無関係ではない。周知のごとく平安朝の古典文学史上には原典が現存するものは稀少であり、すでに散逸したり、残存していても作者が確定されなかったり、本文が整っていないものがある。そのような中で、記紀、『万葉集』以降においては、天皇とのかかわりが深いもの——いわば天皇圏のテキスト——が日本の古典文学史を支えてきた<sup>(4)</sup>。『枕草子』もまた、その範囲内に存在し、原典もなく諸本の問題は残るが、作者が明確であり、多岐にわたりながらその内容も章段ごとに今日の読者に共感できたことが「日本を代表する」前提となる理由である<sup>(5)</sup>。

しかし、今日の実教育現場においては、天皇圏に存在する古典文学

として本文(作品/テキスト)が読まれているかといえそうではない。具体的には前提となる天皇周辺とその時代背景や基盤となる宮廷、後宮に存在する人物個々の有する属性が教育のプログラム内に反映し、児童・生徒に浸透しているかという点、必ずしもそうとはいえないのである。それは今日における作者論・作家論から作品論、さらにテキスト論へ転化したことや、読者論に傾倒する読みが主張されたこととも無関係ではないだろう<sup>(6)</sup>。

たとえば、第一勅撰和歌集の『古今和歌集』(以下、『古今集』)に関しては、醍醐天皇の勅撰によることや、後世の和歌の規範とされたことなどから、天皇圏の産物であることが比較的色濃く示された歌集である。しかし、今日の『古今集』、中でも四季歌にみる季節のとらえかたは、日本人の象徴的かつ代表的な季節観へと昇華し、日本人の多くが春の花や秋の紅葉に美意識を抱き自らの価値観として受容しているのが実状である。

## 三、〈ズレ〉／〈異論〉の観点とは

このような天皇圏の中の本文(作品/テキスト)である『古今集』に比べて、『枕草子』は、歌集ではないという形態はもとより、その構成や内容は規範という枠組からはほど遠い。このため『古今集』と比べることじたい批判される向きもあるが、強いてあげるならば、後世の和歌の規範ともなった季節観(春の花、秋の紅葉など)との比較ができればよい。それは「春はあけぼの」という一節が、この規範には収まらず、ずれが生じており、作者は規範に対して意識・

無意識にかかわらず、自説を唱えたように理解ができるところにある。<sup>(7)</sup>

ちなみに、現代の読者もつ出典への認知度については、春といえど花、といった価値観は多くの読者もつもの、その出典が『古今集』をはじめとした古典和歌にあることへの認知度は必ずしも高くない。一方で「春はあけぼの」に関しては、価値観としての浸透までは至っていないが、このフレーズは広く知られ、出典が『枕草子』であることへの認知度は高い。(少なくとも教育機関の児童・生徒・学生には「春の花、秋の紅葉」は共感されるが出典が『古今集』や古典和歌にある認識は高くはなく、「春はあけぼの」は出典とともに認知されていることはこれまでの筆者の授業受講者の反応に基づく限り、顕著な傾向である)ここに現代の「春は花」と「春はあけぼの」の違いがある。

さて、いま規範とのずれが「春はあけぼの」に指摘されてきたことを確認したが、このずれは『枕草子』を読み解く重要な観点となる。ここにいうずれについてさらに探究する前に、改めて「ずれ」とは何かについて辞典をみておくと、

ずれ〔名〕(動詞「ずれる」の連用形の名詞化)ずれること。位置や時期、考えなどが、標準・基準からはずれて合わないこと。くいちがひ。

『日本国語大辞典』第二版「ずれ」の項目  
考え方や感じ方などに少し隔たりがあること。食い違い。「意見の―を調整する」「感覚の―を生じる」

『デジタル大辞泉』「ずれ」の項目

といった意味が確認できる。さらに、これらを意識的に行う場合は「ずらす」(本来の範囲からそらしたり、その範囲を他に及ぼしたりする)、『日本国語大辞典』第二版「ずれ」の項目)という行為もある。いずれも本来あるべき状況A(「標準」や「基準」などになりうる)とは異なる状況Bとなった場合に位相差が生じ、それを「ずれ」といい、AからBへの位相差が意識的になされるときに「ずらす」とらえてよいだろう。

このことは会話においても応用できよう。A氏による発話がB氏に受話されるとき、そこにはさまざまな要因から位相差としての(ズレ)が生じ、発話Aはそのまま受話AではなくA'の関係となる。このA'をBと示せば理解されよう。以下、この「ずれ/ずらす/ずらし」といった位相差にかかわることを総称して(ズレ)と称する。なお、さらにそこから異なった思いや考えのもとに言動など新たな展開が誘発された場合を(異論)とした。<sup>(8)</sup>

さて、前述した『古今集』の中で、その仮名序についても(ズレ)／(異論)の観点に通じる指摘が浅田徹よってなされている。<sup>(9)</sup>浅田は、

和歌は基本的に一人称でうたわれる小叙情詩である。三人称的な描写や単なる命題提示は、和歌とはなり得ない。(中略)  
和歌が一人称の抒情という形式を持ち、かつ短小な定型に依拠しているという事実、あたかも歌人自身の感情が(複雑な操

作を経ずに）そのまま形を成したかのようには和歌を見なす見方を後押しした。……日本の歌論は大変単純化するならば、「和歌」心が自ずから流出したもの」という虚構の規定と、さまざまに技巧の実践的な解説とが取り合わされてできているといつてよい。

と述べて仮名序冒頭の「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」に示された和歌の定義を歌論の観点から「虚構の規定」ととらえなおした。この「虚構の規定」を筆者なりに言い換えると、抽象的な心から自発的にあらわれたものを抽象的な言葉に、それも定型の五七五七七に置換できる、という約束事にする、そのように考える、ということであろう。だが、当然ながら心から言葉へ同一に置換することも、まして五七五七七の定型に収めることも不可能である。そして、この心から言葉への過程においてもやはり位相差としての〈ズレ〉が生じている。このことを知った上で嗜むルールにこそ「虚構の規定」が当てはまるのである。

#### 四、枕草子の〈対話〉にみる〈ズレ〉

このような〈ズレ〉の観点は『枕草子』には随所にみられる。たとえば前述の「春はあけぼの」も、既存の知識（和歌や漢籍など）を受容した作者／書き手が、その思考のもと、書く行為・書記化を通じて、変容した成果が本文（作品／テキスト）となるならば、当然その過程に生じてくるといえる。いまひとつは本文（作品／テク

スト）内に示された言葉のやりとり、言い換えれば〈対話〉の場において、そこには〈ズレ〉が生じよう。<sup>(10)</sup>

この『枕草子』の〈対話〉についてはすでに研究史上、筆者を含め論じられてきた。<sup>(11)</sup>たとえば、上野・川島論文においては「対話」を林四郎の提唱する「話線」の四分類をもとに、1「交流話線」（すべての対話の基礎となる型で、話し手と聞き手の発する言葉が互いに刺激しあい、対話が展開するもの）・2「引き出し話線」（話し手が聞き手にたいし特定の情報や、特定の応答を期待し要求するもので、いわゆる「問」と「答」である）・3「すれちがい話線」（聞き手からの反応はあるにはあるが、話し手の気持ちをくみとってはもらえない型）・4「ぶつかり話線」（すれちがい話線がさらにエスカレートしたもので、互いに己を押し通し対立・反撥し合い、相手をすこしも理解しようとはしないもの）に区分して分析をした。<sup>(12)</sup>

結果としての四分類をもとに論じたことは『枕草子』の〈対話〉の特徴を把握する上で示唆に富むといえる。しかし、たとえば近時「対話」を論じた津島知明は日記的章段（津島の用語は「日記回想段」）のうちの連続する章段群のうち「職におはしますころ」（九六段）から「二月のつごもりごろに風いたう吹きて」（一〇二段）に限定して（「秀句モード」）（筆者注・「一般的な発話、つまり意思伝達を効率よく果たすための発話を通常モードとすると、そこに何らかの捻りが加わった、技巧的な発話である。その種の発話をここでは秀句モード」と名付けておきたい）と津島は述べる）が生れる現場と、その詳細（意味付け）が示されてきたことになる」といった結論を導いたものの、上野・川島論への言及は十分になされてはいなかつ

た。ここに、上野・川島論の問題点があるとすれば、それは分類の基準にあることは容易に想像できる。たとえば他の分類に重なる点が生じることはないのか、あるいは分類の基準は適切か、といったことである。無論、言及をしなかった津島を批判するつもりはない。むしろ、これらの論考に導かれつつ、どこかあまりにも当たり前ととらえられているためか、見落としている点があるのではないか、ということへの指摘である。それは、心も言葉も抽象的であるがゆえに、完全かつ的確な相互理解に至ることはない、という点であり、常に〈ズレ〉が生じ、その〈ズレ〉が〈異論〉を導くということである。<sup>13)</sup>

ちなみに、この〈ズレ〉が一致することはないものの、浅田の「虚構の規定」にならえば、それを指すことを否定するものでもなく、漸近線のようなものである。

さて、それでは〈対話〉において〈ズレ〉／〈異論〉はどのようなにあらわれるのであろうか。具体的に高等学校の教科書に掲載される著名な「雪のいと高う降りたるを」章段をみることにする。<sup>14)</sup>

### 五、〈ズレ〉／〈異論〉がもたらす魅力

『枕草子』における代表的な人物は、女房としての清少納言と宮仕への対象であった中宮定子であることは疑問の余地はなからう。よって、ひとつの典型的な対人関係をこの主従の両者に置き、両者のかかわりを示し、それ以前の流れを受容し、それ以後の流れを左右する〈対話〉にはどのような〈ズレ〉／〈異論〉があるのかを考

えてみる。まずは本文をあげると、

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめり」と言ふ。

(二八〇段「雪のいと高う降りたるを」四三三～四三四頁)<sup>15)</sup>

雪が多く降り積もった日、定子の居所にある格子はいつもと違って下げられたままで、炭櫃の火を熾して女房たちが集まって語らいをしていたことが書かれている。この冒頭には章段の場面を雪・格子・炭櫃・物語などを用いて説明をする。ここには天候(雪)から建具(格子)へ、あるいは部屋の調度(炭櫃)から女房の語り(物語)へと、遠景から近景へ、あるいは自然から人事へと対象を展開し、当座の中心となる定子が清少納言に向けて言葉投げかける〈対話〉に続く。

ここで複数の女房たちの中から定子は「少納言よ」と清少納言を指名し、「香炉峰」との発話によって場面は展開する。その発話は、直後の「〜と仰せらるれば」から明らかなように、直接の会話文として再現されている。

清少納言にすれば、この問いかけは他の女房たちの中で、自分だけに向けられて印象が強く記憶に残った言葉とならうが、この言葉

をどのように感じたのかは示されていない。周囲を意識すればこの単独の指名は驚きや気恥ずかしさ、あるいは戸惑いもあっただろう。さらに、尊敬する定子からの呼びかけであれば喜びや誇りを感じたことも推測される。しかし、このような感情はほとんど表現されていない。それは定子に関しても同じであり、「香炉峰」の問いかけはやや唐突なのである。

そして、この問いを読者が読み取るには、注意が必要である。それは実際の場の再現ととらえても、そこには省筆があり、比較的にむき出しになった〈対話〉であることを知る必要が出てくる。いわば、書かれたことによる「少納言よ」以降の言葉には作者の加工として叙述の工夫がなされており、定子から清少納言に向けられたと同時に、清少納言の記憶をもとに書く行為を経て書記化され読者に向けられている。このとき読者と本文にもさまざまな〈ズレ〉が生じてくる。たとえば極端に言えば、定子と清少納言のそれぞれの属性に関する情報の有無は、読者が得る理解度の深浅を変えるのである。

一方で、この場にいる周囲の女房たちに目を向けると、彼女たちにとっては自分が向けられなかったことに対して安堵した者や、嫉妬を抱いた者もいたかもしれない。ふりかえって、清少納言には、そのような視線も向けられていたことが想定される。ここに定子のもとに仕える名も無き女房も清少納言と定子の〈対話〉には響いてくるのである。

さて、定子の言葉にあった「香炉峰の雪」はすでに当時の女房たちには広く知られていた『白氏文集』「香炉峰下、新たに山居を卜し、

草堂初めて成り、偶東壁に題す。」の一節であることはすでに指摘があるが改めてあげると、

日高く 睡り足りて 猶ほ起くるに慵し、小閑衾を重ねて 寒さを怕れず。

遺愛寺の鐘は 枕を敲てて聴き、香炉峰の雪は簾を撥けて看る。

匡廬は便ち是れ 名を逃るるの地、司馬は仍ほ老を送るの官為

り。

心泰かに 身寧きは是れ帰処なり、故郷 何ぞ独り長安に在る

のみならんや。

（『白氏文集』巻第十六 律詩 原漢文<sup>16</sup>）

これは平安中期の漢詩集『千載佳句』や、定子の死後十年余り後の寛弘九（一〇一一）年前後に成立した『和漢朗詠集』にも同様の一節が採録され、『枕草子』にも「文は 文集」（二〇〇段）として載る有名な一節である。いわば定子サロンに仕えるものにとつては当然の教養であり常識であつたろう。

その上での定子が発した「少納言よ」にはじまり「香炉峰の」の続く問いは、清少納言をはじめ女房たちに多少の差はあつても、白居易の漢詩を思い出させ、その世界を想像させただろう。ただし、やはり「多少の差」は、同じ詩句のもとでありながら、女房たちはそれぞれが決して完全に一致することのない〈ズレ〉を生み、異なる想像をしながら、一方で、清少納言はどう答えるのかなどを考え、たことであろう。結果として、清少納言は女官に格子を上げさせ、

自らは簾を掲げてみせたのは漢詩の一節「簾を撥けて看る」をこの場にふさわしいようにアレンジしたが、このアレンジこそ〈ズレ〉からの〈異論〉といえる。

また、このときの要は定子の要求が雪を見ることにあると理解したことによる。ここで即座に雪が見えるようにしたこと、眼前の雪は漢詩の世界の「香炉峰の雪」に見立てられ、定子が想起していた漢詩の世界を、清少納言が現実の場に再現してみせたのである。

さらに繰り返しれば、その再現を書記化したのがこの章段である。このため、「簾を撥けて看る」は必ずしも素直に問いに答えたのではなく、まずは格子を上げさせたことで、清少納言は漢詩の一節に場に応じた自らの判断を加え、「漢詩文の表現を今この場にこそふさわしい言葉として再生させるもの」として独自性を示した。その結果、その場の雪は白居易が眺めたであろう「香炉峰の雪」の世界に見立てられ、「文学的な雰囲気」へと場を転じさせたが、ここにもやはり〈ズレ〉／〈異論〉が読み取れる。

この清少納言の対応が示されるまで、女房たちは、定子の問いかけをさほど難問とは思わなかったかもしれない。なぜなら、当時はすでに著名であった漢詩であり、この日の大雪を「香炉峰の雪」に見立てる機知は女房たちにも想定されたと考えられるからである。しかし、清少納言は言葉では応じなかったことで女房たちの予想を見事に裏切り、雪を眺める定子の期待には応えなかったのである。もちろんここには正解はなく、仮に正解が表わされたとしても、そこには自ずと〈ズレ〉が生じる。清少納言は定子の問いに対する答えとしてまずは言葉での返答を排し、簾を上げさせた後に御格子を上げる

行動をとるといった〈ズレ〉(ずらし)を自らの答えとして示した。この行動がそのまま〈異論〉といえる。このときの予測される言葉は津島の理解を参考にすれば「秀句モード」たる和歌や漢籍に則ったものと考えることが穏当であろう。しかし、そのどちらでもなく、むしろそれらを凌駕し、昇華したところの答えを示したのである。

その結果、雪を見た感想や雪景色の描写などの代わりに定子がお笑いになったことが述べられる。この笑いは、発問の意図を理解し、白居易の世界観を保ちつつ、雪を眺めることができた「我が意を得たり」の満足の思いとともに、予想を上回る〈ズレ〉／〈異論〉の出来栄への喜びによるものである。さらに続く女房の言葉も安易に作歌や作詩によって応じるだろうと予想した反省とともに、清少納言こそ伺候にふさわしい人物であるという、称賛の叙述であるが、これらを導いたのもやはり〈ズレ〉／〈異論〉といえよう。そしてこれらを経てこの章段はやや唐突に終わる。このため、清少納言の行為から派生した、定子の笑いや女房の言葉が余韻をもち、清少納言にとつての至福の時間の残響を読み取るとき、往時の事実からもすでに〈ズレ〉の生じた省筆の中で、問答において〈ズレ〉／〈異論〉がもたらした章段の魅力があらわれるのである。ちなみに、後文まで読んだ読者にすれば、冒頭で下げられていた格子は、後の定子の問いから清少納言の対応に至る布石となっていたことが理解されるだろう。女房たちの談笑の内容や、炭櫃の火のさまなどにはふれずに、省筆されたことは一方で無駄のない言葉選びとなつて伏線を張った布石が置かれていたことも〈對話〉を支えている。

## 六、おわりに——〈ズレ〉と〈異論〉を学び、多様性に

### 満ちた社会へ

『枕草子』に対峙し、その叙述の方法を明らかにしていくとき、そこには時代の変化とともに、ある時代を背負った読者の読む姿勢も更新されていく。それが前述の小・中・高の校種の違いに資する教材としての『枕草子』に反映されることである。今日では、特に高等学校において古典が不要である、といった議論が世の中に出てくることも、時代の変化から生じた〈ズレ〉に対する〈異論〉とも考えれば、あながち否定すべきことではない<sup>(9)</sup>。ただし、大きくとらえると、一千年を越えて届いた「少納言よ」の問いに代表される言葉と、それを受容する現代人の〈ズレ〉を認識することは、本論からの推測が許されれば、まだまださまざまな魅力を見出すことに通じている。その発掘からはじめることで、時代に即した〈異論〉の唱え方も変化し、古典を必要・不要と唱えるだけでなく、受容する主張に導かれていくことになろう。

『枕草子』「香炉峰」章段の〈対話〉について〈ズレ〉と〈異論〉の観点から叙述の方法を論じたが、まだまだ課題も多い。本文（作品／テクスト）の生成と受容の諸相から、今日の多様化する社会に存在する一人ひとりが備えるべき当然のことを強いて抽出すれば、それは自他の違いがあることであろう。他者の言葉を否定することが安易に行われる現代社会において、自他の違いをしっかりと認められることは必要不可欠であり、多様性に満ちた社会の実現を願うことに発想を得た本論であるが、これまで当然のことと見落とされ

てきた点を示し、古典教育にも活かされるべき提言としたい。

### 注

(1) 今日の代表的なコミュニケーションの方法に「会話」がある。この「会話」に関しては近時、木下蒼一朗「意味することと伝達することの違い」(『東京大学言語学論集』四二、二〇一九年九月)の論が哲学者ポール・グライスの「会話」の考えである「話し手と聞き手の間で行われる意味伝達の営みである」をもとに、「私たちが日常的に行なっている『何かを意味する(mean)』ということ『何かを伝達する(communicate)』ということの間には違いがある」と主張した。本論では枕草子内の二者間の会話を中心に論じることから〈対話〉とする。一方、平安朝の文学において書くことを論じたものには源氏物語については陣野英則「源氏物語の話性と表現世界」(勉誠出版、二〇〇四年)をはじめとした一連の論考、和歌では浅田徹他編集『和歌が書かれるとき』(和歌をひろく第二巻、岩波書店、二〇〇五年)、近年では蜻蛉日記について斎藤菜穂子『蜻蛉日記新考——兼家妻として「書く」ということ——』(武蔵野書院、二〇一八年)などがある。

(2) 「小学校における「春はあけぼの(枕草子)」の授業改善——中学校との接続を視野に入れて——」(『高知大学教育学部研究報告』第七八号、二〇一八年三月)

(3) 拙稿「枕草子」春はあけぼの」を学ぶ——清少納言の叙述感覚——」専修大学附属高等学校「紀要」第二十号(一九九九年三月)において反復してあらわれた助詞「も」に注目し、作者の主張を浸透させる機能のあることを論じた。

(4) 前田雅之は『古典的思考』「I 国文学は「天皇システム」と対峙できるか 01公と玉躰——天皇システムと日本の公共性(一)——」(笠間書院、二〇一二年、初出は『発言者』一〇五、二〇〇三年)に



において天皇制に替わり「『天皇システム』という無色透明な言葉を用い」、「日本は形式的には律令制以来今日まで天皇システムが基本的国制であり、撰閣政治・院政・幕府・内閣はいずれも天皇システム内の権力であった」と指摘し「天皇システムは、近代までは、初めて勅撰和歌集古今集」の権威が和歌を長く文芸の王様に居続けたことからも分かるように、国制のみならず、文芸、礼儀、儀式、さらに宗教に至るまでその正統性を付与する究極的機能や役割を果たしていたのである」と述べる。筆者はこの「天皇システム」を参考に、その影響が及ぶ範囲をイメージしやすくするために「天皇園」という用語を使用する。

(5) ただし、残存する『枕草子』に関しては、すべてひとりの作者によるかどうかを決定づけることは意外と困難であり、今日でも山中悠希『枕草子はほんとうに清少納言が編集したものか』(『古典文学の常識を疑うⅡ』勉誠出版、二〇一九年)は『枕草子』の編集という観点から問題提起をしている。

(6) 小森潔は「『枕草子研究』論——「言説史」へ——」(『國語と國文學』平成十七年五月特集号、二〇〇五年五月)において「枕草子が個々の読者によって様々に読まれながら各々の時代に現象してきた様相をたどること」を「言説史」と命名し、「作家論」の積み重ねから「文学史」へと道筋にならって「読者論」から「言説史」を提唱した。なお、本文の属性を考慮すべく、本文(作品)/テクストと併記しておく。

(7) 上野理「春曙」考(『文藝と批評』第二巻第八号)は「和歌の伝統にたつ当時の美意識のなかで特異なものである。ふつうならば「春は花」「秋は紅葉」というであろう」と指摘する。和歌史的な表現からの〈ズレ〉／〈異論〉の一例といえる。また、上野は「枕草子初段の構想と類書の構造」『国文学研究』第五十集、一九七三年六月)において、「春はあけぼの」が『白氏文集』卷三十一所収の律詩「霞光は曙あけぼの後火よりも殷あかく」(原漢文)を下敷きとしたことや、配列を類書から学んだことなども指摘する。ちなみに池田亀鑑『全講枕

草子』(至文堂、一九七三年、初出は一九五六年)には「春について、その当時の季節美感の常識であった春宵とか春夜とかを挙げずに、ずばり『曙』と言いつつたところ」と指摘し「宵」や「夜」をあげる。

(8) 〈ズレ〉に通じる論点はたとえば、小森潔『枕草子 逸脱へのまなざし』(笠間書院 一九九八年)がある。小森は「逸脱」によって枕草子の特徴を論じた。近年では古瀬雅義『枕草子章段構成論』第二章第二節「なかなるをとめ」の表現意図と「ずれ」の様相、(笠間書院 二〇一六年十月、初出は『国語国文論集』第二十七号(一九九七年一月)が「ずれ」を用いる。

(9) 浅田徹「歌論の言説——「やまとうたは、人の心を種として」——」『世界へひらく和歌——言語・共同体・ジェンダー——』(勉誠出版、二〇二二年)

(10) これは正確に言えば、実際の対話における往時のやりとりの段階と、それに取材して生成された本文(作品)/テクスト)での〈対話〉にも発生する。さらに、読者が本文(作品)/テクスト)を受容する際にも〈ズレ〉／〈異論〉はある。その本文(作品)/テクスト)の質・量と読者数だけ立ち現れるものである。このことは特に教育の場ではたとえば「教育の機会均等」や「公平性」、さらには「理解」という用語によって見落とされたり、隠されたりしたものではないだろうか。いずれも十分に扱われていない問題であり、改めて考えたい。

(11) 枕草子の対話に関しては上野志保子・川島和佳子「『枕草子』日記章段における対話の類型」(『東横国文学』第二三号、一九九〇年三月)、津島知明「秀句のある『対話』——『枕草子』九七段から一〇二段までの日記回想章段群——」(『國學院大學紀要』第五四巻、二〇一六年一月)などがあり、拙論『枕草子』「故殿の御ために」章段の〈対話〉と機能(『論叢』玉川大学文学部紀要』第五八号、二〇一八年三月)において、贈答歌の機能を応用し「贈答歌的(対話)」として分析を行った。その結果顕在化した表現の背景に潜在

化した表現を読み取ることや、間テクスト性を活かして既存の和歌をふまえた重層性のある読みができることを示した。

- (12) 林四郎「談話行動のタイポロジー」(『日本語学』第二巻第七号、一九八三年七月) また、上野・川島論が例としてあげた章段は以下のとおり。

1 「交流話線」の例「三条の宮におはしますころ」(二二三段)

三条の宮におはしますころ、五日の菖蒲の輿など持てまゐり、薬玉まゐらせなどす……ほかよりまゐらせたるに、青ざしといふ物を、持て来たるを、青き薄様うすやうを、艶なる硯の蓋に敷きて、「これ籬越しに候ふ」とてまゐらせたればみな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける。(二八〇段)

2 「引き出し話線」の例「雪のいと高う降りたりけるを」(二八〇段)

「少納言よ。香炬峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

3 「すれちがい話線」の例「僧都の御乳母のままの」(二九四段)

一人の男が火事で家が燃えてしまったので救済求めに来たのに対し、「みまくさをもやすばかりの春のひによどのさへなど残らざるなむ」

4 「ぶつかり話線」の例「五月の御精進のほど」(九五段)

(清少納言)「今はいかで、さなむ行きたりしとだに、人におほく聞かせじ」など笑ふ。(中宮)「今も、なか、その行きたりし限りの人どもにて言はざらむ。されど、させじと思ふにこそ」と、ものしげなる御けしきなるも、いとをかし。(清少納言)「されど、今はすさまじうなりにて侍るなり」と申す。(中宮)「すさまじかべき事かは」などのたまはせしかと、さてやみにき。

- (13) ロシアの思想家、ミハイル・バフチン(一八九五年～一九七五年)が『ドストエフスキの創作の問題』(一九二九年)、『ドストエフスキの詩学の諸問題』(一九六三年)において対話・多声性(ポリフォニー)を論じたのが著名であり、日本古典文学とのかかわりでは、ダニエル・ストリューブ「グローバル化と日本文学の研究」

ミハイル・バフチンの小説論と西鶴を中心に」「比較日本学教育研究センター研究年報」第十一号(二〇一五年三月)・日・マック・ホートン・但馬みほ訳「『源氏物語』における女房たちの役割——ヘンリー・ジェームズとミハイル・バフチンの文学理論を背景として」『平安文学の古注釈と受容』第三集(武蔵野書院、二〇一一年五月)がある。

- (14) 同段については早稲田久喜の会編著『学びを深めるヒントシリーズ 枕草子』(明治書院、二〇二〇年九月刊行予定)にも述べる。

本論と重なる部分もあることを了承願いたい。

- (15) 今日では、一般に入手しやすい活字化された本文ならびに、中学・高等学校の検定教科書に掲載される本文は三卷本系統が中心である。ただし、近時島内裕子『枕草子』(ちくま学芸文庫)は「現代では、『三卷本』で『枕草子』を読むことが主流となっているが、昭和二十年代頃までは、『枕草子を読む』とは、基本的に、北村季吟の『春曙抄』を読むことであつた」と述べ、能因本系統『枕草紙春曙抄』を底本とする。本論の枕草子の本文は杉山重行編著『三卷本枕草子本文集成』(笠間書院、一九九九年)をもとにしつつ章段・頁数は松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年)、「心地よげなるもの」(七六段)以降は三卷本系統第一類本陽明文庫蔵『枕草子・徒然草』(陽明叢書国書篇第十輯)を参照し、その他、必要に応じて諸本を参考とした。
- (16) 本文は新釈漢文大系『白氏文集』三(明治書院、一九八八年)による。

- (17) 坏美奈子「頭中将のそぞろなるそり言にて」の段——「草の庵をたれたたづねむ」の意味——『新しい枕草子論 主題・手法 そして本文』II 篇第二章(新典社、二〇〇四年)

- (18) 古瀬雅義「香爐峯の雪いかならむ」への対応と展開(『枕草子章段構成論』笠間書院、二〇一六年、初出は『安田女子大学紀要』第二三号、一九九五年三月)

- (19) 明星大学日本文化学科シンポジウム「古典は本当に必要なのか」

(二〇一九年一月十四日、明星大学日野キャンパス)、のちに勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』(文学通信、二〇一九年九月)。

(なかだ こうじ)

**To Shonagon? or to a wider audience.:  
Recognizing the potential variations in the significance  
and interpretation of the dialogue based on the recipient.**

Koji NAKADA

Abstract

This article discusses a novel approach to analyze one well-known chapter, “Koroho” in *Makura no soshi*. The potential that the message addressed a range of recipients diversifies the significance as well as the interpretation of the dialogue. Adopting this approach in Ancient Japanese Literature Education is well aligned with the current culture which values diversity.

Keywords: 〈Dialogue〉, 〈Difference〉, Acceptance, Classical education